

24

東日本大震災津波支援にかかる座談会

《テーマ：復興に向かって》

日 時 平成25年3月1日(金)

会 場 ふれあいランド岩手 会議室

沿岸及び内陸市町村社協の職員とが、震災後の災害ボランティアセンターの取組みを振り返り、今後の災害に活かすべきことや復興への想いを話し合い、記録として残すことを目的に座談会を開催しました。

出席者

大船渡市社協 主事	伊藤 勉
釜石市社協 主任	八幡 亘
宮古市社協 相談員	小林 さつき
盛岡市社協 主事	藤澤 佳代
北上市社協 主査	佐藤 剛
一関市社協 主幹	菅原 敏



北上市社協 佐藤剛主査



盛岡市社協 藤澤佳代主事



宮古市社協 小林さつき相談員



一関市社協 菅原敏主幹



出席者全体写真



大船渡市社協 伊藤 勉主事



釜石市社協 八幡 亘主任



県社協事務局

(1) 震災以降の活動を振り返って

① 災害ボランティアセンターの立ち上げ

進 行：県社協

本日はお忙しいところ、ありがとうございます。この座談会では、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）で活動してきた皆さんの想いを伺いたいと思います。まず、みなさん市町での災害VC設置経緯から教えてください。

大船渡：伊藤

発災翌日の3月12日に市役所の玄関前に設置しました。災害VCの受け入れは社協と市の防災計画に位置づけられていました。11日の夜、「明日から設置してほしい」と市から依頼を受けて立ち上げましたが、同僚や他沿岸社協の職員の安否が不明の中、ボラセンを自分で立ち上げなければならない使命感と、県社協から応援が来るのか等の不安が入り混じっていた記憶があります。

釜石：八幡

発災の2日前、3月9日にも地震があり、その時は大きな被害がなかったことから、今回もおそらく大丈夫だろうと思っていましたが、警報が発令され慌てました。災害VCのことは、菊池係長が発災直後から意識していて、3月14日に市から要請が入り、立ち上げました。被害情報が入らず、どの程度の規模になるかなど、不安の多い中での立ち上げでした。

自分自身も自宅が被災し、家族の安否が分かるまでに3日かかり、その間自分が何をしていたのか、あまり覚えていません。

宮古：小林

3月13日に立ち上げました。周辺市町村の被災状況が分からぬ中での設置でした。

市役所からの要請が基本だと思っていたが、市役所も被災し、社協独自で立ち上げを行いました。電話も繋がらず、県社協もすぐには来ないだろうと思っていました。自分たちで出来ることからやっていこうと思いました。

盛岡：藤澤

3月11日の発災直後、社協事務所のある福祉センターに住民が集まってきた。トイレや公衆電話の貸出しなど様々な対応をしました。カーナビのテレビですごい映像が流れたことで被害の大きさを知りました。

3月12日からボランティア登録の受付をはじめ、当初は「ボランティアをしたい」「沿岸に行きたいがどうすればよいか」という問合せが多くありましたが、出来ることが限られていたため、ひたすら状況説明を行っていた記憶があります。

一関：菅原

発災直後から、本所・支所、それぞれの地域での被害確認、避難所運営を行いました。

沿岸の状況を知ったのは、翌12日だったと思います。「沿岸は大丈夫だろうか」と心配していたのですが、「沿岸は壊滅的だ」という情報が入り、次に、沿

岸社協職員の安否が気になりました。

② 災害VCの活動（被災地支援、被災地への支援）

進行：県社協

他市町村社協職員の安否を気にしていたのは内陸部も同じで、県社協にも多くの問合せがありました。様々な状況での災害VC立上げとなりましたが、その後の活動はいかがでしたか？

大船渡：伊藤

当初は、市民へ様々な窓口を案内する業務が多かったです。13日頃から物資が届き始めると、荷降ろしと仕分け作業がはじまり、1週間後にニーズ調査と並行して泥出し、家財道具、畳などの運びだしなどに移りました。その後、時間の経過とともに活動内容が変化していました。

宮古：小林

当初は市外・県外ボランティアの受け入れは行わず、市内のボランティア中心に活動を行い、4月中旬以降、県外ボランティアの受け入れを始めました。

避難所を回った際、地域の自治会長、民生委員と面識があるため、すぐに状況を聞き出すことができたことは、今までの社協の活動が生かされたと思いました。

釜石：八幡

釜石市では平成14年に水害を経験し、災害VCを設置した経験があります。経験上今回も必要だ、という意識があったため、立上げはスムーズでしたが、ニーズ把握や支援に頭が回りませんでした。

行政からも民生委員と協力し、情報収集をして欲しいと要請がありました。発災から1週間ほどで連絡が取れ始めましたが、民生委員の半数が被災しており、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（以下、支援P）の協力を得ながら体制を整えました。すべてが想定外だったため、「うまくできなかつた」という気持ちがあります。

③ 課題と感じたこと、準備が足りなかつたと感じたこと

進行：県社協

これまでの活動の中で課題と感じたこと、準備が足りなかつたと感じたことはありますか？

一関：菅原

震災以前、県社協ボランティア・市民活動センターの企画委員会の中で、「非常時には内陸は沿岸へ、沿岸は内陸へ支援をしよう」という話をしていましたが、その形をつくる前に起こってしまったことは残念です。

宮古：小林

ブロック派遣職員の応援は助かりましたが、1週間交代で色々な人が来るため、現地としては疲れも感じました。時々、知っている人が来て、相談に乗ってくれるだけでも違うと思います。

釜石：八幡

ブロック派遣当初は、派遣職員に何をお願いしたら良いのか迷いました。知っている人が来てくれるだけで気持ちが楽になるので、派遣職員と地元職員をつなぐ役として県社協職員に一日だけでも来てもらえると助かると思います。

大船渡：伊藤

内陸部をはじめとする県内社協には後方支援の他、ボラバスでも入ってもらい、助かりました。県外の派遣職員は多いのに、県内職員はなぜ少ないので、戸惑ったことがあります。

一関：菅原

震災以前から顔見知りの職員から相談を受けることもありました。課題や愚痴などを聞いてあげられる人が支援に入ることも地元職員の気持ちが楽になるのではないかと思いました。

④ 岩手県社協からの支援に対しての感想

進行：県社協

県社協も今回の経験を次に活かすことが必要だと感じています。今も少し話があったと思いますが、県社協からの支援について何か感想はありますか？

大船渡：伊藤

沿岸の市町村社協は不安でした。誰か同じ社協の職員に駆けつけてもらいたい、来てもらえると心強いと思っていたと思います。電話が使えず、連絡が取れなかったため、連絡係の人がいれば助かると思います。県社協で作成した、受付やチラシなどの様式は参考になり、助かりました。

釜石：八幡

ラジオで特例貸付の情報が先行したため、県社協に確認の連絡を取りたかったのですが、(釜石市社協の)電話が使えない状況でした。2日後に県社協の職員が駆けつけてくれ、内陸の情報、他の市町村の情報を仕入れることができました。

北上：佐藤

災害VCの立ち上げ経験が無いので、どうすれば良いのか困りました。内陸にも、県社協または同様にサポートしてくれる人がいれば助かると思います。

⑤ 印象に残ったボランティア活動・団体、活動をして

困ったこと

進行：県社協

県内外から多くの団体が支援に入りましたが、どの様に受け止めていますか？

宮古：小林

震災直後はつながりを持つと相手のやりたいことが見えてきましたが、今の時期になるとニーズの面から難しい部分もあります。新たな団体を立上げる動きもあるので、これからどのような形でつながることができるかを検討する必要があると思っています。

大船渡：伊藤

多くの団体への対応は1人では大変なので、後方支援に入った派遣職員にお願いして2～3人で話を聞くようにしました。

水害支援活動を行うNPOが社協に土嚢袋を提供するよう各方面に要請してくれたおかげで助かったこともあります。経験のある団体は頼れると感じました。

釜石：八幡

釜石は比較的支援団体には恵まれていたと思います。まずは活動に入ってもらい、信頼関係を築いてから連携を取るようにしました。関係を築く際の資料として、県内NPOの活動内容や実績等が分かる一覧表のようなものがあると助かると思います。

一関：菅原

支援者にフィルターをかけて、沿岸の社協が困らないような役割も内陸社協にはあったと思います。

沿岸の拠点を内陸に置くNPO団体もありますが、住民に信頼を得られることが難しいように見受けられた場合もあったので、社協が住民との仲介役となりNPO団体と一緒に活動する場面も見られました。内陸社協は支援者と沿岸社協との連絡調整の役割も果たしていかなければならぬと思いました。

盛岡：藤澤

「〇〇の社協には活動を認められています」という団体でも、話を聞くと疑問が湧くこともありました。このまま沿岸に入れば現地が困る、という団体を止めることも大変でした。また、ボランティアバスは社協を知ってもらう良いきっかけになりましたが、「参加すれば何かもらえると聞いた」という声がありました。ボラバスを運行する意味を参加者に話す必要性を感じました。

釜石：八幡

田舎のやり方と都市部のやり方に多少のズレは

あったと思います。ボランティアに来た方の中には、不審な方もおり、「何をする為に来たのかな」と思う人もいました。

大船渡：伊藤

過去に支援経験がある方で、「自分は避難所に行きたい」と自分の思いを通そうとする人もいて、対応に困りました。

(2) これから備えとして

① 被災を受けたときに何をすべきか、社協として何が必要か

進行：県社協

では、被災を受けた時に社協は何をすべきか、何が必要だと感じましたか？

釜石：八幡

避難所まわりやニーズ把握を自分たちで行なったのですが、地元職員がセンターから離れると都合が悪いため、最初はブロック派遣の方々にお願いしました。他県の方が方言や地元の言葉の意味を理解できないこともあります。

宮古：小林

自治会長との連絡調整を派遣職員にお願いしましたが、本来なら地元職員が行うべきだった、と今感じています。支援が終わった後に繋がりを残す上で現地の職員が行うべきだと思います。また、災害VCを立ち上げる時は、状況を見て情報収集をしてから動き出すことが大切だと思いました。

大船渡：伊藤

自治会長、民生委員などに、発災時は社協が災害VCを立ち上げる可能性があることを事前に話しておく必要性を感じました。役割を事前に把握していれば作業の負担が減ったと思います。

また派遣職員の役割分担をある程度マニュアル化しておいた方が良いのではないかと思います。内部に関しては、VCと社協本部の情報共有する時間が不十分でした。

盛岡：藤澤

普段からの他市町村社協職員と関わりが大切だと感じています。信頼関係があればすぐに相談が出来ると思います。

一関：菅原

地域との関係は大切にしていきたいと思います。地域はこんなに力を持っていたんだ、と今回の震災で気付かされました。支援を受ける方にも力がなければ支援は受けられない。支援する力、受ける力、どちら

の力も付けていく必要があると思います。

② 発災直後の自分に戻るとしたら、どのようなことを言いたいか

進行：県社協

今、皆さんのが2年前の自分に伝えるとしたら、どの様なことを言いたいですか？

大船渡：伊藤

「ボラセンで全部解決しようとするな」ということ。外部団体の活動が目につき、余計な所で悩んでしまう部分が多くたったと思います。せっかく支援してくれている所と対立してしまうこともありました。それぞれ役割があり、補い合いながら出来るところで動くことが大切だと思いました。

宮古：小林

「流れに乗れるようになりなさい」・「周りを見なさい」ということ。ニーズの変化、住民の気持ちの変化に一步遅れることで、VCとして出来ることがなくなってしまう感じがしました。

また、自分を見失う時が多くあったので、まわりを見渡すと助けてくれる人がたくさんいることで我に返れると思います。

釜石：八幡

「時間が経てばなんとかなるよ」ということ。当時は絶望感が強く、後ろ向きな気持ちになりましたが、様々な人の支援を受け、時間が経てば何とかなるんだなあと思いました。

盛岡：藤澤

「感情移入しすぎないように気を付けなさい」ということ。社協が注目されることが嬉しく感じすぎ、住民の意思を叶えてあげたい、という強い気持ちが働いてしまうがありました。

一関：菅原

「抱え込まない。現場に仲間がたくさんいる」ということ。全部自分で解決しようとしてしまう。抱え込みすぎて、職員が潰れるのが怖い。通常の社協事業にも言えることだと思います。

北上：佐藤

「行動力をつけておく」ということ。行動力、瞬発力が必要になってくると思うので。

③ 震災支援活動の経験を踏まえ、今後何をすべきか

進行：県社協

これまでの災害VC活動の経験を踏まえ、これから何が必要だと思いますか？

宮古：小林

思った以上に市民ボランティアが多かったが、現在は活動から離れてしまった方が多くいます。今でも続けたい、という声もあるので、今後はその声を大事にしていきたいと思っています。

今後、市民対象のボランティア講座を定期的に開催する予定です。

大船渡：伊藤

地域にこんな人たちがいたんだ、というのが良く分かりました。地域に潜在しているものを引き出していくたいと思っています。

養成講座以外にも復興支援以外に市内で出来るボランティア活動を見直していく予定です。

釜石：八幡

人それぞれ傷の深さが違うと感じています。失くしたものがモノだけの人、肉親を亡くした人それぞれです。仮設では隣近所の人がわからないという状況もあるので、被災者一人ひとりに応じた支援を行いたいと感じています。

一関：菅原

内陸避難者は情報がなく、孤立感を感じています。地元に戻りたいという人もいると思いますが、このまま内陸に住もうと思っている人もいます。地元の生活支援相談員に内陸避難者のサロンに参加してもらい、避難者の想いを地元に届けていただけるよう、今後も働きかけていきたいです。

内陸避難者が暮らしやすい環境づくり、帰りたいと思っている方に対する支援が課題です。そのためにも沿岸との連絡を密に取っていきたいと思います。

北上：佐藤

北上の内陸避難者へ避難者対象に温泉ツアーを企画し、外に出る機会を設けましたが、やはり「帰りたい」と思っている人がいることを感じました。若い世代の方は北上に移住したい、高齢になれば地元に戻りたいという声が多いと感じます。今後は北上から沿岸へ向かうツアーの企画を検討したいです。

(3) 支援を復興の力に変えて

●多くの支援に対して今、思うこと

●これからの復興、想い

進行：県社協

最後に多くの支援に対して今、思うこと、これから の復興への想いを聞かせてください。

北上：佐藤

色々な方と接する機会が多くなり、得たものも大きかったのですが、それを得ることができた背景には被害に遭われた方、たくさんの亡くなられた方がいます。そのことを忘れないように、これからも大事にしていきたいと思います。

今後も被災者・避難者に寄り添いながら、支援を続けていきたいと考えています。

一関：菅原

人との関わりの大切さを感じました。自分の知っている沿岸社協の仲間も、ボランティア活動の中で知り合った家族や友達も亡くなりました。「内陸だから…」「家があるから…」などと被災状況の違いで差別・区別され、人の関係が壊れてきたのを見てきました。

私たちの活動が、人と人が関わる際の壁を少しでもなくすことが出来れば良いと思っています。

宮古：小林

自分が住んでいる地域が変わってしまい、今でもふとした時に「すごいことが起こったんだなあ」と感じています。

今までのことを思い返すと、多くの人が支援に来てくれたことが一番嬉しいことだと思います。自分の地域でもないのに、なんでこんなに熱心にしてくれるのだろう、ボランティアってなんだろうと考えました。人とのつながりは、この震災で得たものの一つです。

宮古が元気になっていく姿を発信していくことが恩返しになるのではと考えています。自分たちの経験を残しておく、伝えていくことが大切だと思います。

釜石：八幡

内陸社協からの多くの支援、自分の街でもないのに心配してくれる人がたくさんいることに感謝したいです。感謝の気持ちをずっと忘れずにいたいと思います。

岩手県内はじめ、関東ブロック等社協のバックアップ体制を受けたことは、心強く、社協で仕事をして良かったと思っています。

阪神、新潟の震災ではどこか人ごとのように思っていましたが、自分が被災者になり、それではいけないと感じています。今後、震災が起った時は自分が支援者という意識を持って行動できればと思います。発災当時は絶望的でしたが、今では普通に過ごしている時間が貴重だと思えるようになりました。

平凡なことが一番の幸せです。震災のことをずっと伝えていくことが大切だと感じています。

大船渡：伊藤

市民、県内外、すべてのボランティアに感謝をして

います。なかでも、市民ボランティアの活動する姿には大船渡の新たな可能性を感じました。また、ボランティア連絡協議会をはじめとする既存の団体が今後活動する上で刺激となりました。

被災3県に全国の社協職員の支援が入っていることを知り、社協は本当にすごい組織だと思いました。もっと全国組織の力を活かすことが出来ると思うし、今後災害が起った時は自分が支援者として駆けつけたいと思っています。

復興というゴールも色々な形があると思います。復興の意味を自分たちで考え、風化をさせないこと、支援していただいた方たちに伝えていくことに取組みながら、活動を継続していきたいと思います。

進行：県社協

震災は失ったものも多いのですが、得られたものも大きく、ボランティアの力、人の力の素晴らしさを実感しました。

今回得られたものを終わりにせず、これまでの多くの支援を力にして、これからも復興に向けて、様々な社協活動に取り組んでいきたいと思います。

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。